鳴神Ⅵ遺跡発掘調査報告書

１９９１年３月

㈶ 和歌山市文化体育振興事業団

例　　言

1　本書は和歌山市が計画した地方改善事業における道路敷設工事に先立つ発掘調査の報告書である。

2　調査は和歌山市の委託事業として財団法人和歌山市文化体育振興事業団が受託して行った。

3　調査期間は平成２（1990）年12月３日から同月21日までであった。

4　発掘調査、整理作業及び本書の作成については益田雅司が担当し、遺物の実測については奈良大学学生亀井美希、西中美穂の協力を得た。

5　調査にあたっては和歌山市教育委員会をはじめ関係機関、地元関係者の方々に多大なご協力を得たことを記して感謝の意を表したい。

目　　次

1．　はじめに……1

2．　調査の概要……1

3．　小結……4

図版一　　調査区位置関係図

図版二　　土層図一

図版三　　土層図二

図版四　　遺構図

図版五　　出土遺物一

図版六　　出土遺物二

図版七　　調査区写真

図版八　　土層図写真一

図版九　　土層図写真二

図版一〇　　出土遺物写真

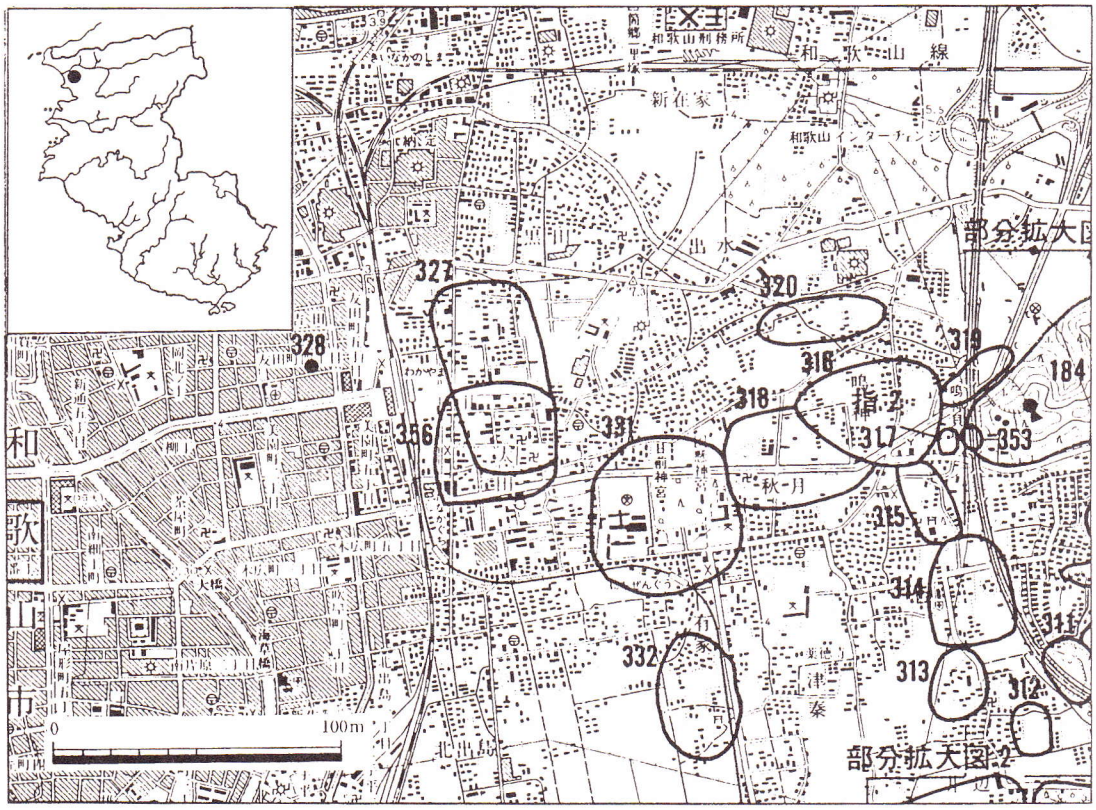
1.　はじめに

紀ノ川下流域の南岸に位置する鳴神地区は、和歌山市の中でも遺跡の密集した地区として知られている。その中の１つである鳴神Ⅵ遺跡は東西約460ｍ、南北約170ｍの楕円形に広がる遺物散布地として確認されている。当遺跡の南部に隣接する鳴神Ⅳ・Ⅴ遺跡、音浦遺跡については和歌山県教育委員会や和歌山市教育委員会、当事業団による発掘調査が行われ、古墳時代を中心とした遺構・遺物が数多く発見されている。[註1]

今回の発掘調査は鳴神Ⅵ遺跡の東側にあたる耕作地に道路敷設が計画されたため、事前に調査を行ったところ地表下約１ｍ付近から土器片等が少なからず出土したので遺構の存在を確かめ、その実態を明らかにする必要から調査を行うことにした。

2.　調査の概要

道路予定地は住宅群の中を通る市道から北に延びて大門川の堤防に至る全長約225ｍの４ｍ幅道路で、発掘調査はそのうちの約180ｍの区間、720 ㎡について行った。道路が２



184　花山古墳群　311　大日山Ⅰ遺跡　312　井辺Ⅰ遺跡　313　井辺Ⅱ遺跡　314　鳴神Ⅱ遺跡　315　鳴神Ⅲ遺跡
316　鳴神Ⅳ遺跡　317　鳴神貝塚　318　鳴神Ⅴ遺跡　319　音浦遺跡　**320　鳴神Ⅵ遺跡**　327　太田・黒田遺跡
328　吉田窯跡　331　秋月遺跡　332　津秦遺跡　353　興徳寺跡　356　太田城跡
「和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図」（和歌山県教育委員会　1989）より抜粋

度直角に曲がるクランク状になっているため便宜上南から１区・２区・３区と分けて調査を進めた。

調査方法としてはまず重機で耕作土の除去を行い、その後人力による掘り下げを行った。

１　区

当区では明確な遺構は確認出来なかった。耕作土の下に細砂質の遺物包含層があり、染付を中心とした中世以降の土器片が認められた。その下に小礫から握りこぶし大の河原石の混積層が縄文時代晩期から奈良・平安時代にいたる各時代の土器等の遺物を含んで厚く堆積していた。

２　区

耕作土を取り除いた段階で近世の犂溝群と思われる遺構を検出した。いずれも幅10～20㎝、深さ10～30㎝のＵ字形の細長い溝であったが上部がすでに削平を受けていると考えられるので本来はもっと深い溝であったことが伺える。溝の殆どはおおよそ東西方向に直線的に延びているが、切り合っているものや直交するもの、軸線が異なる一群もあって江戸時代以降連続して水田や畑地として利用されてきたようである。遺物についても各溝から土器片等が出土している。

さらに部分的に９ヵ所（Ａ～Ｉ区）を掘り下げたところ、各区とも１区と同様に礫層が厚く堆積しており、出土遺物についても同じような状況であった。

３　区

地形的制約があって全面調査をせずに部分的な掘り下げを行った。当区は最も大門川に接近した所でもあり、１・２区とは違った様相を示していた。北端部分で川に並行する約20㎝の段差を確認した。また同位置付近の下層でも約30㎝の段差が同様に確認された。

さらに掘り下げたところ、非常に粘り気のある強粘土層が堆積し、須恵器・土師器の細片が少量含まれていた。２区では粘土層は確認されなかったので一段低くなっている３区が一時期湿地帯であった可能性が高い。

出　土　遺　物

大部分は包含層からの出土で、縄文時代晩期から近世にいたる各時代の土器片が出土した。犂溝群を含む上層からは土師器、須恵器、黒色土器、製塩土器、瓦器、陶磁器(染付・緑釉・備前・常滑・青白磁）、瓦（軒平）等の細片が出土している。下層の礫層からは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、製塩土器、瓦器、輸入青磁、陶磁器（含備前焼）等が混在していた。完全な形になるものはなかったが、多種多様な土器が見受けられた。

染付椀（1～3）

いずれも2区上層からの出土で、（1）は外面に調整痕を顕著に残しながら草花文を施している。（2）は厚い底部に削り出しの高台をもつ。外面に文様を施し外底面に記号を記している。（3）は焼成時に変形し高台部に別固体が癒着している。外面と内底面に文様を施す。

施釉陶磁器（4・6）

内面のみ施釉し、外面はヘラ削り調整を施す。（4）は灯明皿で内面に受け口状のかえりを巡らせ一ケ所まるい切り込みを入れる。（6）は外面全体をヘラ削りし、高台も削り出している。

瓦器椀（5）

大きく外上方に広がる体部で口縁端部はまるくおさめる。

黒色土器椀（8）

A類の椀であるが、外面上半部も黒黄色を呈する。

土師器甕（7・9・13・15・18・19・20）

いずれも頸部付近から口縁部にかけての部分である。（7）外反しながら外上方にのびる口縁をもち端部の外面をすこし肥大させている。（9）わずかに外反しながら外上方にのびる口縁をもち端部は丸くおさめる。頸部内面に横撫で調整痕を残す。（13）内湾しながら外上方にのびる口縁をもち端部は垂直につまみあげて丸くおさめる。（15）外上方にのびる口縁で端部をわずかに内に曲げて面をもたす。頸部以下内面をヘラ削り調整する。（18）外上方にのびる口縁をもち端部は内に折り曲げて内傾する面をもたす。頸部以下内面をヘラ削り調整し、外面は赤色顔料で着色している。（19）内湾しながら外上方にのびる口縁をもち端部は内に折り曲げて面をもたす。頸部以下内面をヘラ削り調整し、外面は縦方向のハケ目調整の後肩部に複数の沈線を巡らす。（20）外上方にのびる口縁をもち端部は垂直につまみあげて丸くおさめる。頸部以下内面をヘラ削り調整し、外面は縦方向のハケ目調整を施す。

須恵器杯身（10・11）

（10）は体部が椀状で受け部は断面三角形となり、立ち上がりはやや外反しながら内上方にのびる。口縁端部は内側に傾斜面をもつ。（11）は体部が球形で受け部は外上方にのびて端部は丸くおさめる。立ち上がりは直線的に内上方にのびる。

土師器壺（12）

内湾しながら外上方にのびる口縁部で、二重口縁壺と思われる。接着面をかせぐために接合部外面を断面三角形に肥大させている。

土師器脚部（14）

やや中ぶくれした柱状部から屈曲して大きく外下方に張り出した裾部をもつ。裾端部は外面に稜をもち、内面は丸くおさめる。屈曲部に強いヨコナデ調整を施す。

備前焼香炉（16）

垂直に真っすぐのびる体部と内面に肥大させた口縁部をもつ。

土師質堝（17）

内湾しながら同上方にのびる体部と口縁端部は丸みのある面をもたす。口縁部外面に断面三角形の凸帯を巡らす。

縄文土器甕（21）

外反させた体部に丸くおさめた口縁部をもち、口縁部外面直下に凸帯を巡らした上に不規則な円形の刻み目を施す。内外面共摩滅が著しいが、明褐色系の色調を呈し、焼成は堅緻である。

3．小　結

鳴神Ⅵ遺跡は大門川の南岸に隣接する遺物散布地であり、標高約３ｍの低地に存在する鳴神Ⅳ・Ⅴ遺跡等と比べて一段低い位置にある遺跡である。花山丘陵の端部に接する鳴神Ⅳ・Ⅴ遺跡が茶黄色系の細砂質土層が厚く堆積しているのに対して当遺跡は川原石を含む礫層が厚く堆積していることからも性格の違っていることが伺える。

上層については２区で犂溝が数条検出され、近世以降耕作地として利用されていたようである。

下層の礫層は川原石が多く、各時代の遺物が混在していることからも生活面とは考えにくく、旧河道もしくは河川の氾濫地帯と考えたほうが自然である。それも堆積状況からみて何度か繰り返されており、この付近が近世にいたる頃まで流跡であった可能性が高い。

また下層において小石を含む黒色細砂質土がレンズ状に薄く何層も堆積しているのが見受けられた。特に２区下層においては広範囲に広がっており、何かしら原因があると考えられるが類例もなく今後の課題としたい。

下層から出土した土器群はその殆どが生活雑器であるがそれらに紛れて輸入青磁や茶器類等が出土していたり、窯跡でよく発見される失敗作品などが含まれていることから、上流とされる地点には集落だけでなく官衙的な遺跡や窯跡等が存在していた可能性を示している。

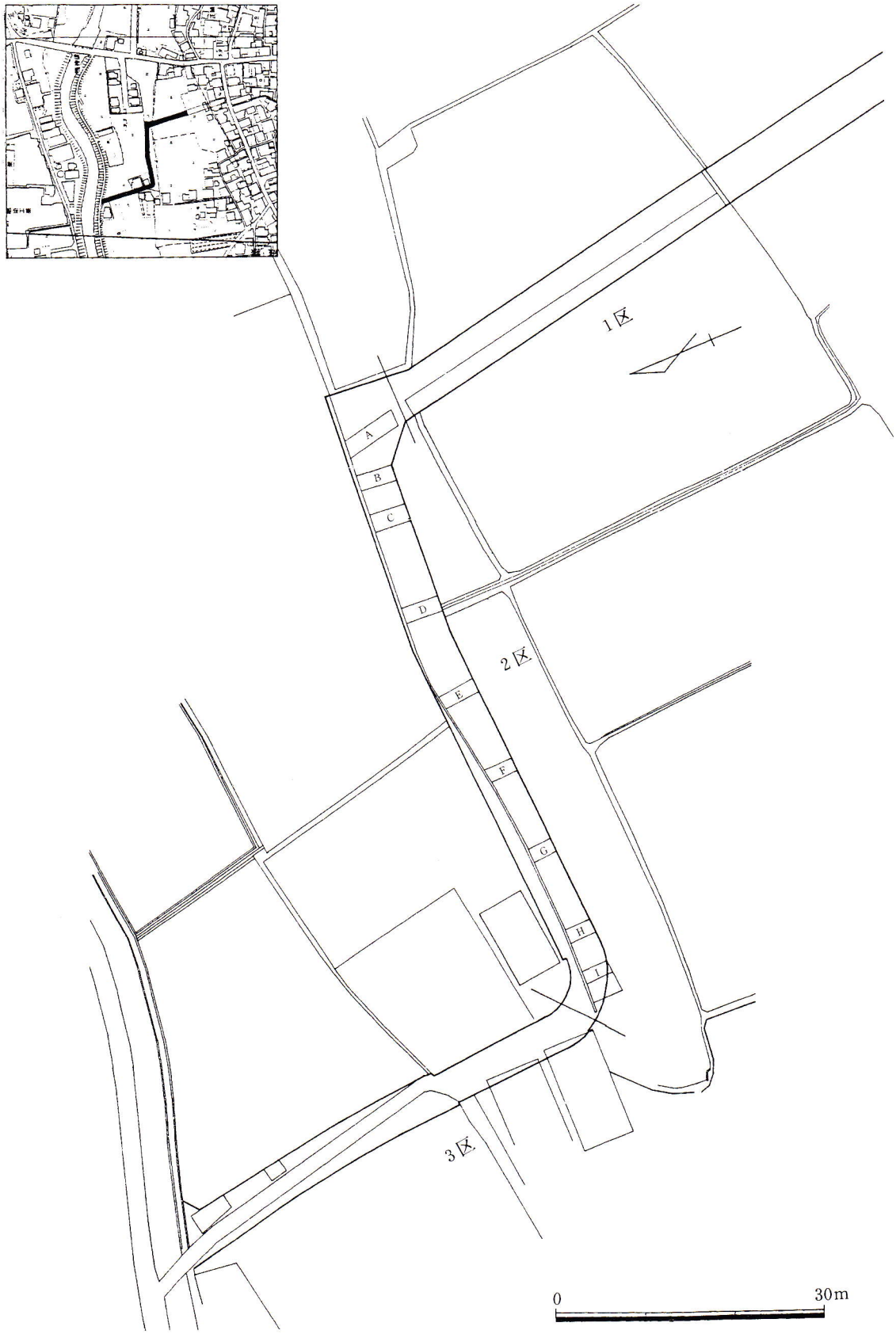
以前和歌山県教育委員会が音浦遺跡を発掘調査した際に官衙跡の存在が考えられるとしていることからも、今後周辺地域を含めた広範囲にわたる研究[註2]が必要であり、そのためにも開発に先んじた実態調査が重要視される。

註１　『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』　和歌山県教育委員会　1984年

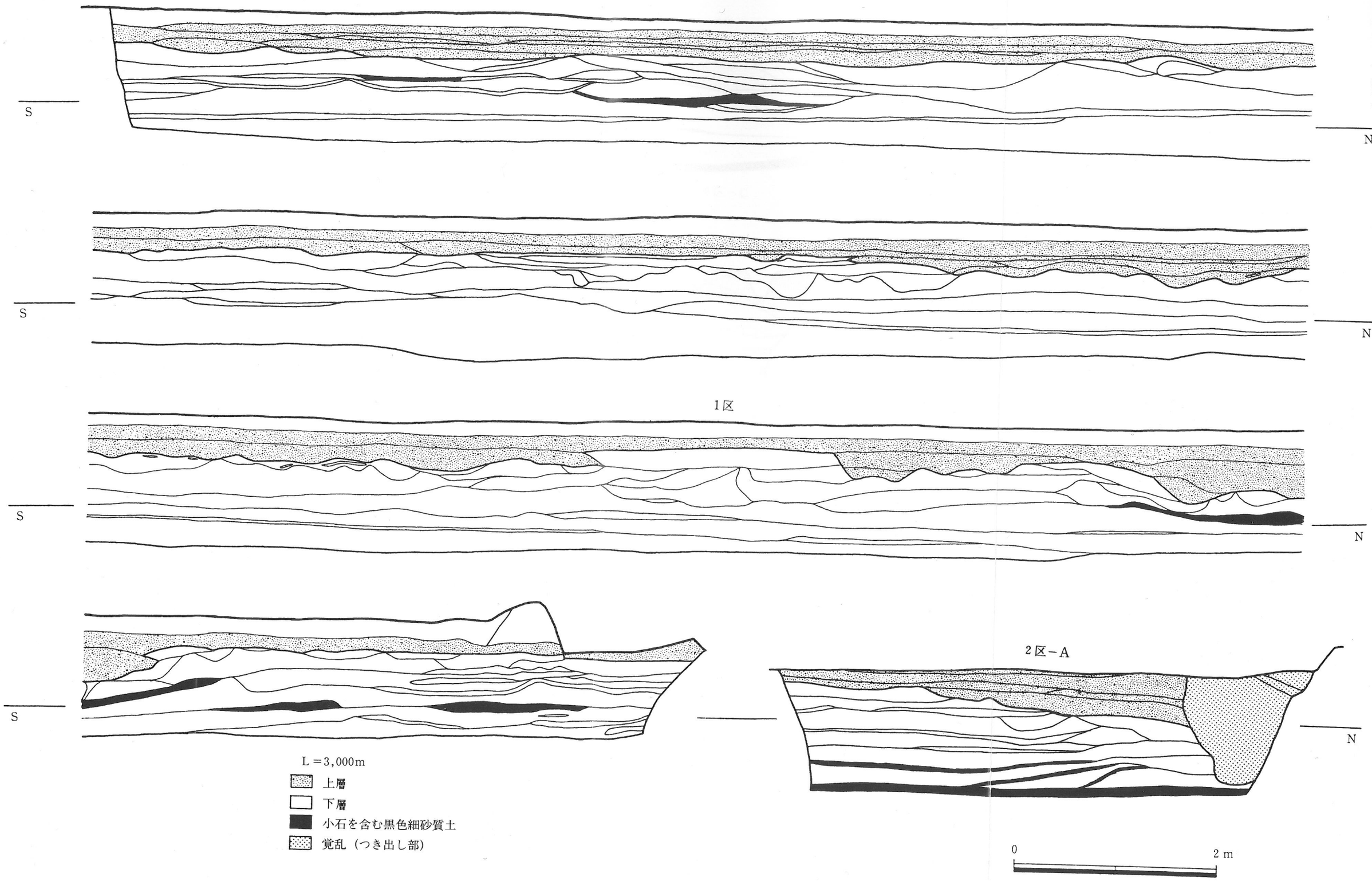
『鳴神Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書』　㈶和歌山市文化体育振興事業団　1990年

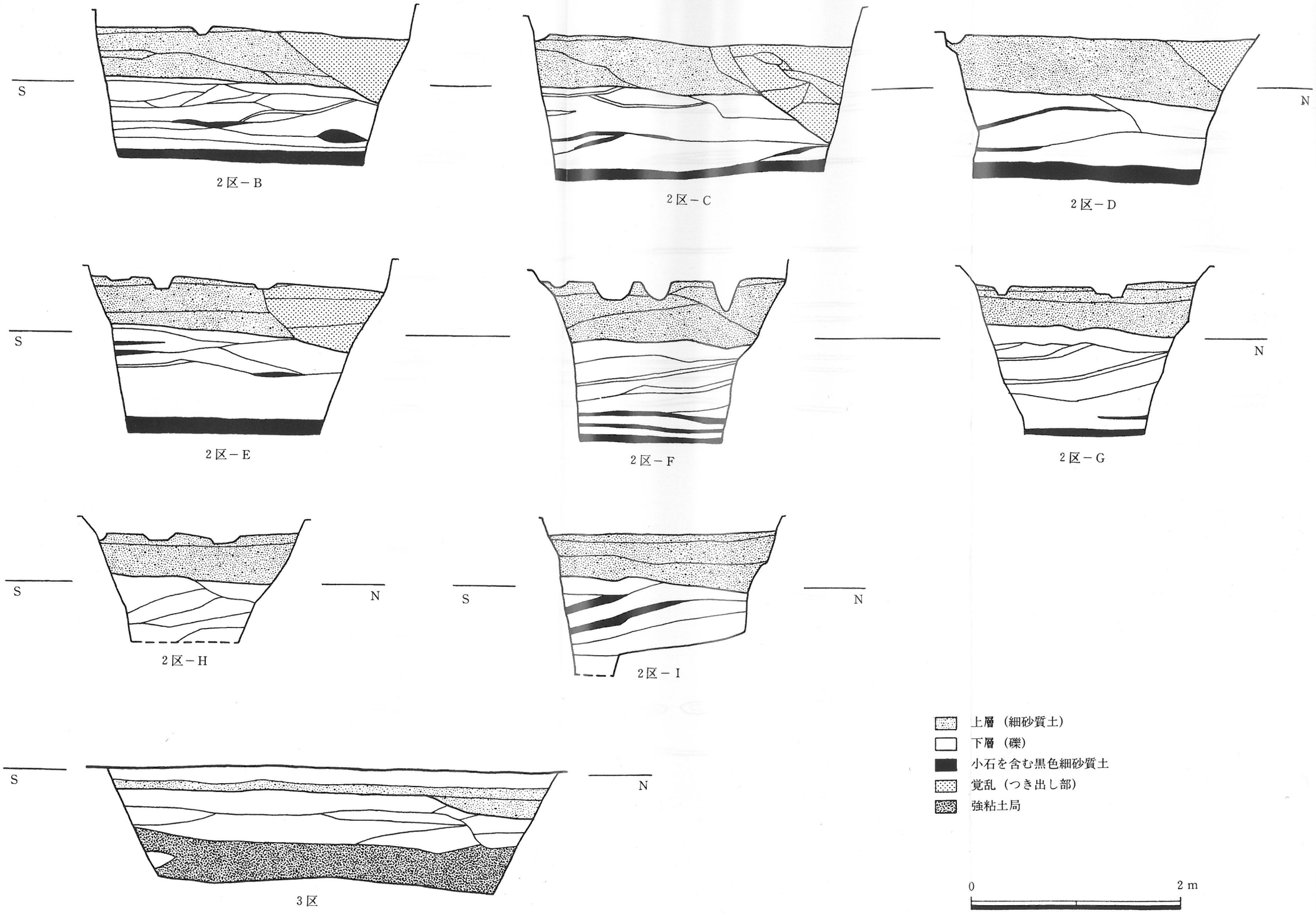
２　『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』　和歌山県教育委員会　1984年

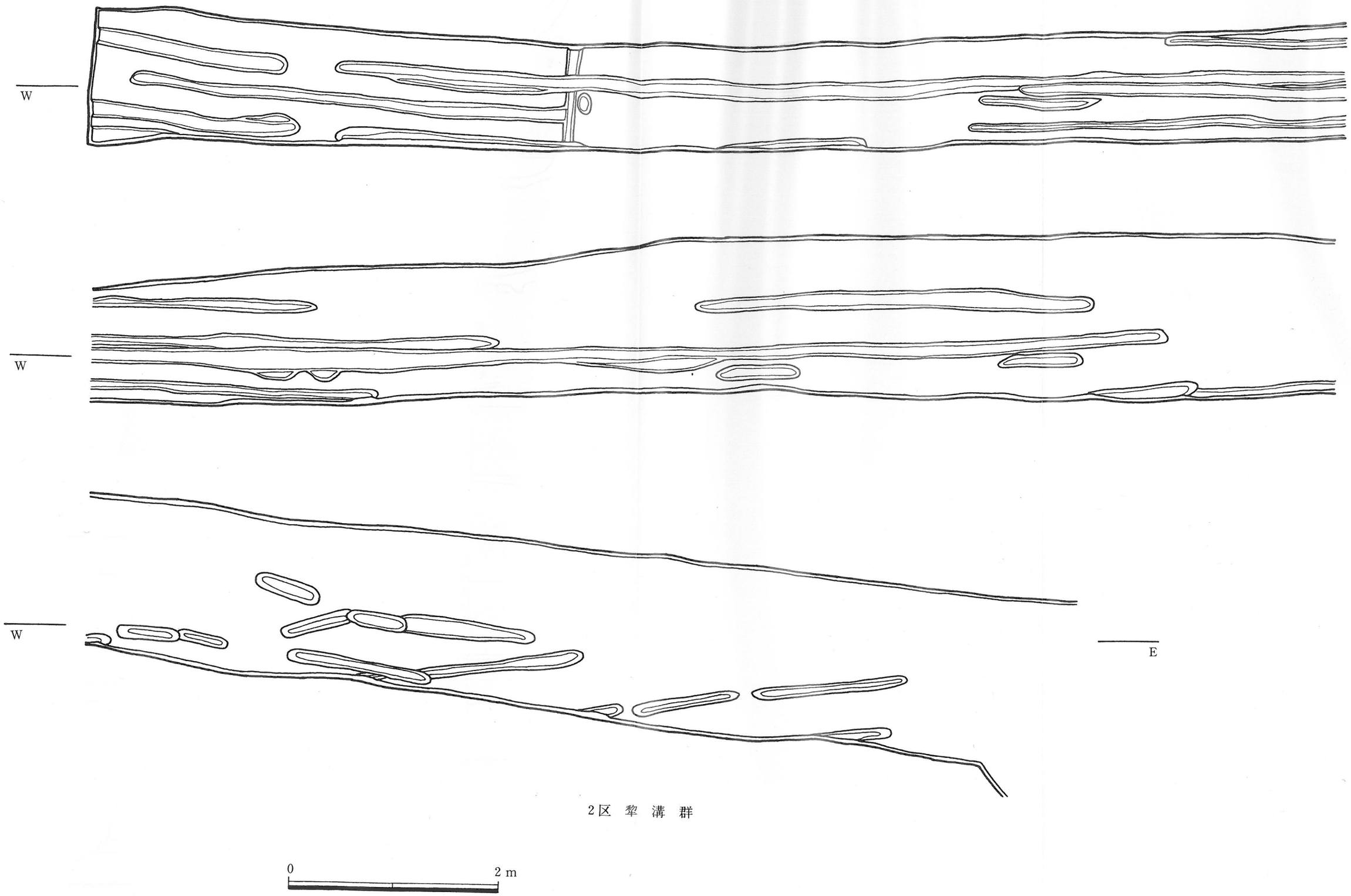
図版一　調査区位置関係図



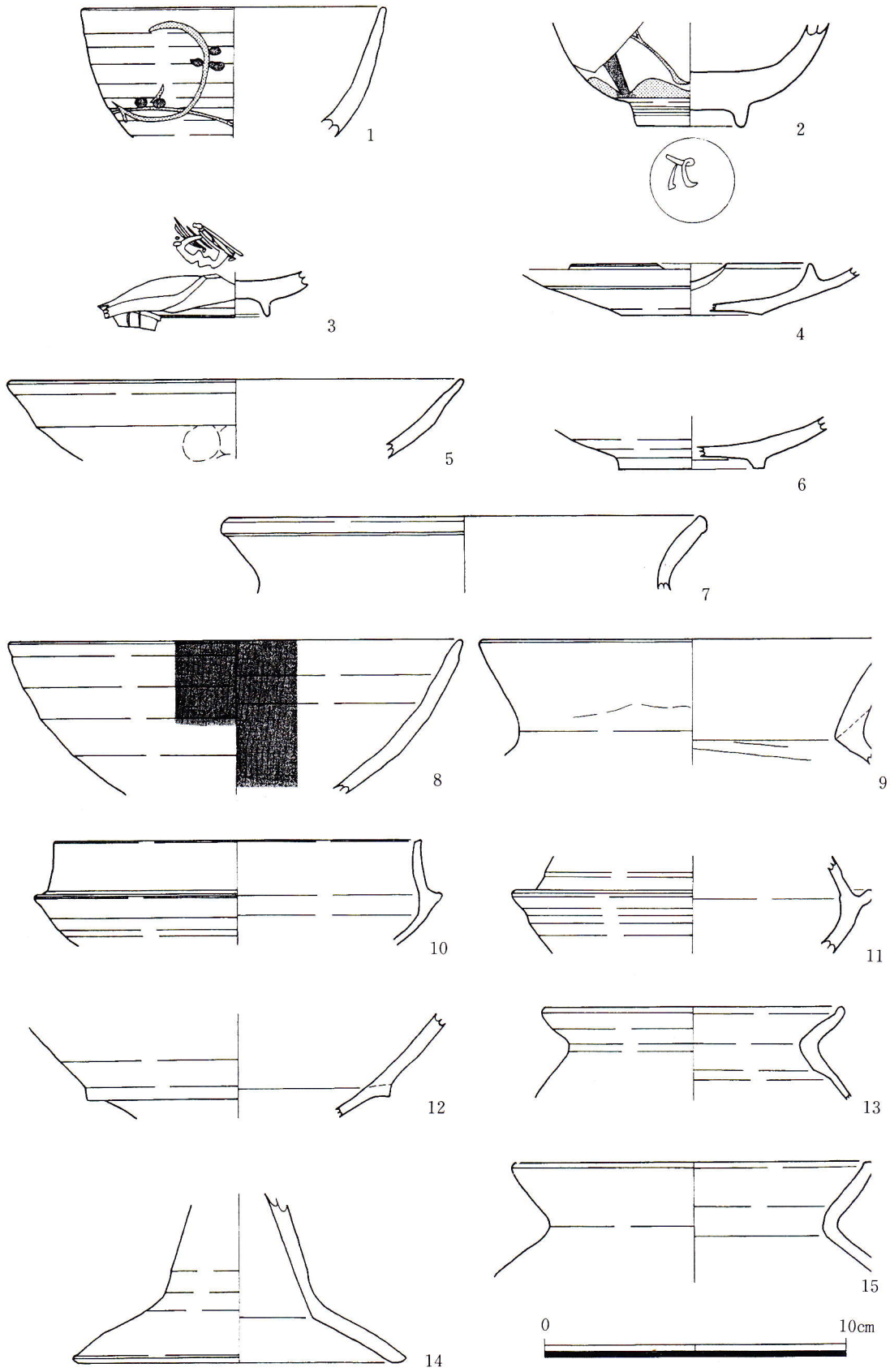
図版二　土層図一

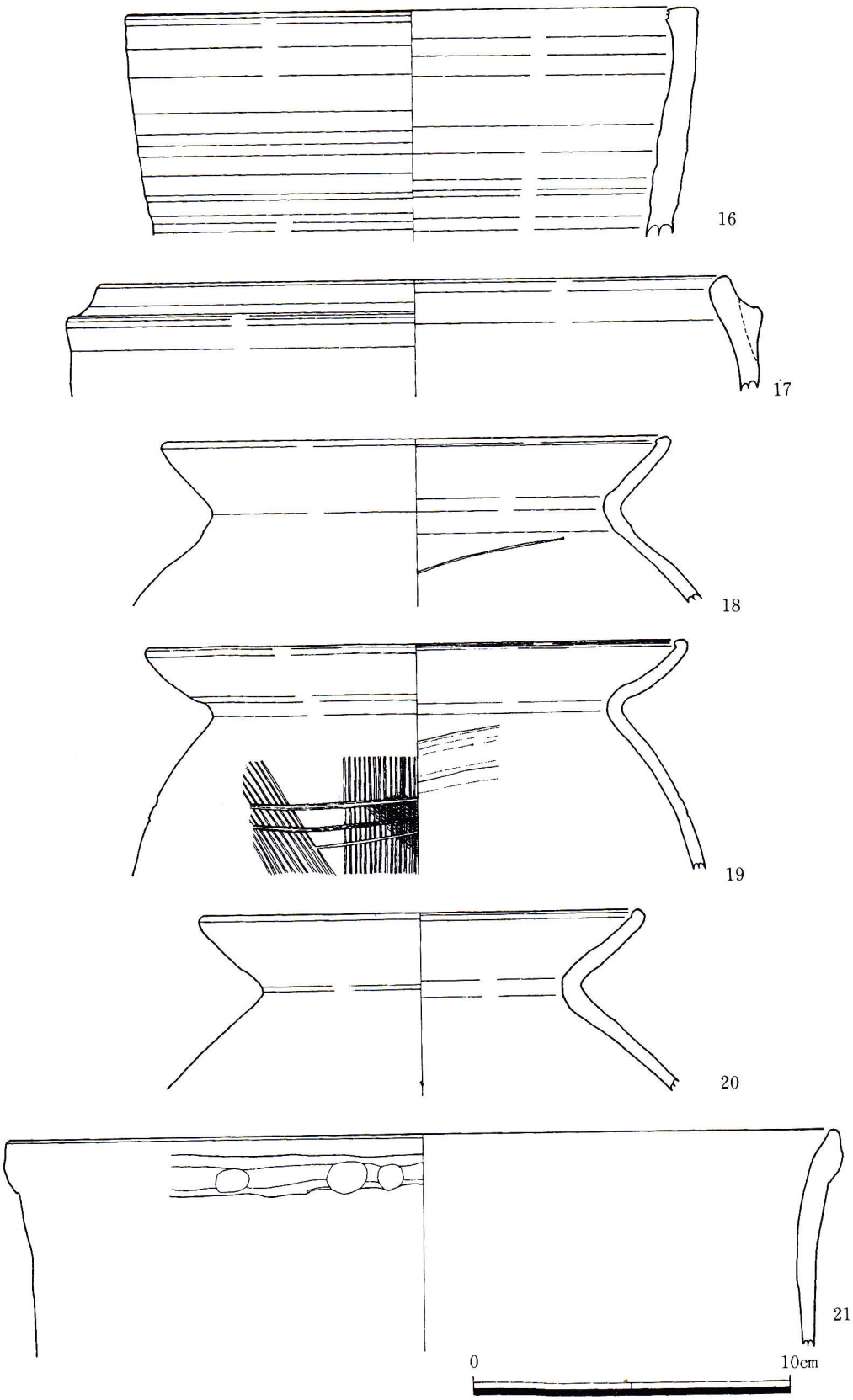



S
N
2区－B
2区－C
2区－D
2区－E
2区－F
2区－G
2区－H
2区－I
3区
上層（細砂質土）
下層（礫）
小石を含む黒色細砂質土
覚乱（つき出し部）
強粘土局
0
2 m



2区　犂　溝　群


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
0
10cm


16
17
18
19
20
21
0
10cm

1区（北から）

3区（東から）

2区　犂溝群（東から）

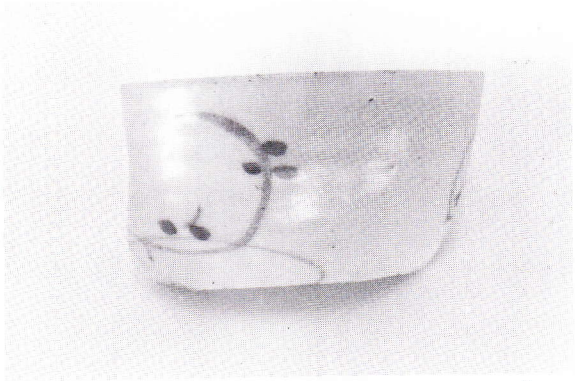
2区犂溝群（西から）

1区

2区－A

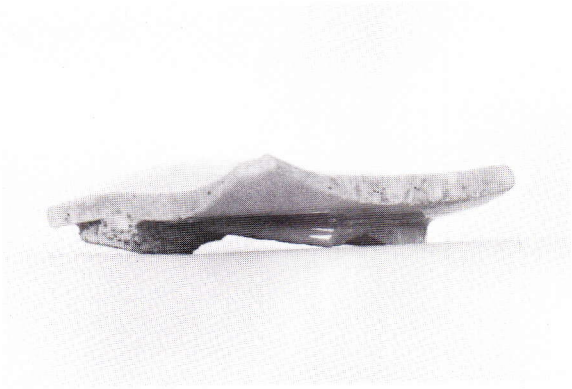
2区－F

2区－H

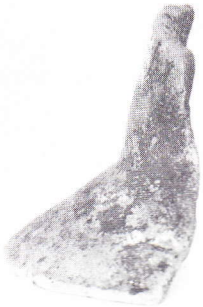


1

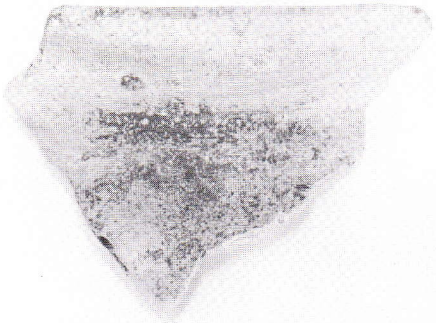
2



3

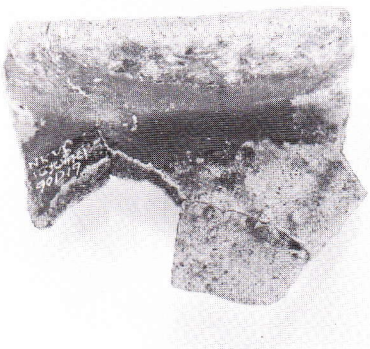


14



18

19



20

21

1991年３月　　印刷・発行

鳴神Ⅵ遺跡発掘調査報告書

発行　㈶和歌山市文化体育振興事業団
住所　和歌山市西汀丁29
印刷　㈱　昇　和　印　刷